感染症トピックス

劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告数が増加しています。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症が全国的に増加しており、県内でも報告数が多くなっています。

■ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症とは？

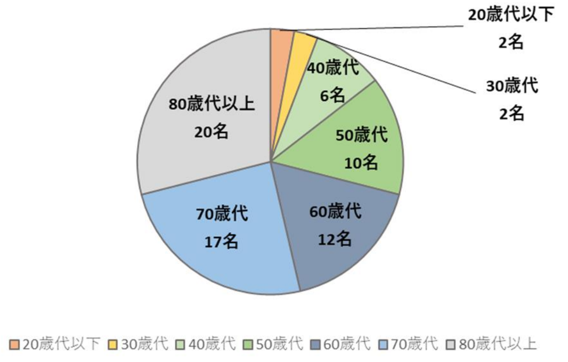
劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、四肢の疼痛、発熱などからはじまり、手足の壊死（えし）やショック症状を引きおこし、死に至ることもあります。国立感染症研究所によると、「国内での劇症型の典型的な症例は 1992 年に初の報告がされており、毎年 100～200 人の患者を確認。このうち約 30％が死亡しており、極めて致死率の高い感染症である」としています。

■ 福島県内の発生状況

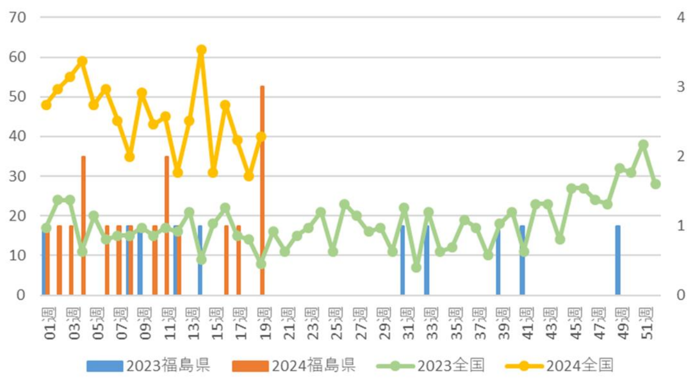
2024 年第 19 週（5 月 6 日～5 月 12 日）現在、県内の累計患者数は 17 名で、昨年と比較して 1.7 倍であり、今後も注意が必要です。

2019 年から 2024 年の第 19 週までの患者の年齢構成、2023 年から 2024 年の患者数の推移は図のとおりです。当県においては、特に 40 歳代以上の患者が多い傾向にあります。

【患者の年齢構成（2019～2024 年（19 週まで)】



【患者数の推移】



■ 注意のポイント

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主に A 群溶血性レンサ球菌（溶レン菌）により引き起こされています。溶レン菌感染症の主症状は咽頭炎で、多くは小児が罹患し、小児科定点疾患の「A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎」として報告されています。溶レン菌咽頭炎も高い報告数で推移しており、劇症型溶レン菌の増加との関係が注視されています。溶レン菌咽頭炎は感染している人から「接触感染」「飛沫感染」「経口感染」します。一方、劇症型溶レン菌感染症は傷口からの感染などがありますが、感染経路が分からないことも多くあります。どちらの場合も、体調の優れない時は早めの受診が重要です。特に、劇症型は症状の進行が急激であるため、基本的な感染対策を行い、傷を清潔に保ち、上記の兆候が見られた場合には、直ちに医療機関を受診してください。

発行：福島県衛生研究所　令和 6 年 5 月　No.21